hito*yume インタビュー

巻頭特集

工藤直子

詩人・童話作家として活躍する工藤直子さん。野原のいきものたちを主人公にした詩『のはらうた』は、平成23年度から、4年生国語の新版教科書にも登場します。全国で読み聞かせの会や講演会を積極的に開催し、大人も子どもも引きつけてしまう"くどうワールド"の原点は、工藤さん流『風景の見え方』にヒントがありました。

【くどうなおこ】
1935年台湾生まれ。お茶の水女子大学中国文学科卒業後、コピーライターとして広告代理店に勤務。その後、創作活動に専念。動植物や風景を主人公にした詩や童話を中心に、エッセイ・翻訳の分野でも活躍中。『のはらうたV』で野間児童文芸賞受賞。

TOSHIBA
Leading Innovation >>>

資産管理・運用管理でお困りですか?

それなら、情報セキュリティ対策もあわせて解決!

毎期の棚卸しは面倒！

運用サポートの負荷が増大！

USBメモリーで情報が流失！

中堅・中小規模企業向け PC 統合セキュリティシステム

PC運用上手

情報漏えい対策と
PCの資産・運用管理をこの1台で！

「PC運用上手」は、情報漏えい対策に必要なセキュリティ機能をまとめて搭載。兵庫県・T町では町内10校に「PC運用上手」を導入。北海道・K市では17校に、長野県では県立校19校に導入されるなど、広域での同時導入が進んでいます。

詳しくは PC運用上手 検索

- Active Directory構築
- ID管理、AD連動
- 操作監視、操作制御
- ソフトウェア配付
- 検疫ネットワーク
- 不正PC検出・排除
- 解析・通知
- PCデータバックアップ
- 資産管理
- システム管理

※全ての機能をご利用いただくには、PC 運用上手のほかに「ウィルス対策ソフト」、「暗号化ソフト」が必要になります。

intel Xeon inside
高性能
スマート

信頼性に優れた
インテル® Xeon®
プロセッサー X3330搭載

●"PC運用上手"は、株式会社東芝の登録商標です。●Intel、インテル、Intel ロゴ、Intel Inside、Intel Inside ロゴ、Centrino、Centrino Inside、Intel vPro、Intel vPro ロゴ、Celeron、Celeron Inside、Intel Core、Core Inside、Pentium、Pentium Inside、vPro Inside、Xeon、Xeon Insideは、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporationの商標です。●Microsoft、Windows、Windows Server、Active Directory、Vistaは、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における商標または登録商標です。●本資料に掲載の商品の名称は、それぞれ各社が商標として使用しているものがあります。●資料の内容はお断りなしに変更することがあります。

株式会社 東芝
デジタルプロダクツ&ネットワーク社
IPネットワーク・ソリューション事業部
〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1
Email : pcman@ieg.toshiba.co.jp

東芝情報機器株式会社
プラットフォーム・ソリューション本部
〒135-8505 東京都江東区豊洲5-6-15（NBF豊洲ガーデンフロント）
Email : pcman.info@toshiba-tie.co.jp

東芝グループは、持続可能な地球の未来に貢献します。
eco スタイル

水牛もキャベツも人間も同じ。それがわたしの原風景。

台湾で暮らした幼少時代

1935年、台湾でお生まれですね。どのような子ども時代を過ごされたのですか。

当時、日本の統治下にあった台湾で、父は小学校の校長をしていました。母はわたしが1歳11カ月の時に亡くなりましたが、兄や姉はたくさんいました。一番上とは20歳差、すぐ上の兄でも7歳離れていて、物心ついたときにはそれぞれ自活していたり学校の寄宿舎に入っていたりで、普段はみんな家にはおらず、実際は父とのふたり暮らしでした。わたしたちが住んでいたのは台湾の南の方の田舎で、ひとりで水牛を眺めたり、蝶やカマキリを追いかけたりというのが多かったですね。

水牛に近寄るのはすごく怖いのだけれど、体育会系の気質をもつやんちゃで生意気な子どもでしたので、怖いもの見たさも手伝って、草を反すうしながら食べている水牛をずっと見て遊んでいました。もちろん人間の友だちと遊ぶことも好き。けれどそれは人間同士という感覚ではなくて、わたしにとっては水牛もキャベツも人間も、もっと言えば風景でさえも、同じように「近しい存在」という感じがしていました。

「かまきりりゅうじくん」たちが詩人として登場する『のはらうた』は、そんな工藤さんの原風景から生まれているように思いますが、なぜ、そのような感覚が芽生えたのでしょうか?

例えば、家の窓ガラスに張りついていたヤモリを内側から見て「心臓がある!」と思ったその一瞬。一瞬だけれど、まるで接写レンズで撮ったかのようにわたしの記憶の中に焼きつき、ヤモリはとても身近な存在になりました。「不思議」を感じた風景もそう。台湾には北回帰線が通っており、夏至のとき、お日さまがちょうど真上にくるのです。毎年それがある何日間かだけは、いつもの風景とどこかが違う。肌もヒリヒリと熱い。実は、真上にお日さまがあることで影が全くできないからです。

理由がわかったのはもっと後のことですが、その不思議な風景はわたしの中に焼きついた。そういったときの一瞬一瞬の記憶は、想い出というより、時系列はバラバラだけれども、ものすごく鮮明に常に身近な存在として残っているわけです。おそらくこういったことは誰にでもあるはず。わたしはそれらをまだ自分を人間だとそれほど意識しない、5、6歳のころに非常におもしろいと思っちゃったからかな、そのままいまに至っているのかもしれません(笑)。

眠れないときの指定席だった父のひざの間

幼少期の記憶をもとに書かれたエッセイを拝見すると、かなりの「お父ちゃん子」だった(笑)ようですが、どのようなお父さまだったのですか?

本当に大好きな父でした。けれどけっこうふたりの間は淡々としたものだったのです。ご近所のおばさんやおじさんは、わたしの一挙一動で笑ったりほめたりといろいろ構ってくれたのですが、父はそういうことをしない人でした。「何かをやれ」も「何かをやるな」も言われたことはない。けれど父のそういった行動には子どもにとってちょうどいい居心地のよさというのがちゃんとあって、わたしはそこが好きだったのだと思います。

非常に鮮明に残っている父との記憶のひとつに、4歳ごろに始まったわたしの死への恐怖にまつわる出来事があります。どこかで「人はみな死ぬ」ということ知ったわたしは、夜、眠ってしまうと起きてこられないのではないかと恐ろしさを感じてしまって、どうしても目を閉じることができない。とうとう困って寝床で泣き出すわけです。

すると父がさっとふすまを開けて、「どうした?」と聞いてくる。幼いながらに本当の理由は言ってはいけないと感じて、「昼間読んだ絵本がかわいそうだったから」とか「転んだひざが痛いの」とか、別の理由でごまかす。父はどんな理由であっても「そうか。ま、来いや」と言って、あぐらをかいているひざの間に入れてくれる。そうすると先ほどまでの恐ろしさは嘘のように消えてケロリと涙は止まるのです(笑)。そんなことが毎晩ではないけれど繰り返しあって、結局、最後まで涙の本当の理由を父には話せずじまい。しかし理由を聞くのでもなく、ただ黙ってひざの間にわたしを座らせる方法をとっていた父は、もしかしたらわかっていたのかもしれませんね。

ほんとうは手をつないで写りたかったのだけれど…、
とうちゃんと、ひまわりと、わたし
記憶の一瞬一瞬に皮膚感覚も残るほどの、宝物。

転校生の処世術として磨いたお話づくり

終戦後、10歳の時に日本に引き揚げて来られ、さまざまな地域を転々とされたことがきっかけで詩を書くようになられたようですね。

わたしが小学校2年生の時に、新しい母が来て3人家族になり、日本に引き揚げて来ました。わたしはこの母とても相性がよく、家族について悩んだことは一度もないのですが、問題は、父が仕事をやめており、非常に貧乏だったということ。最初は滋賀県の姉のところに行き、その後、父の故郷の大分県、それからまた兄や姉のところを転々としました。転校生としてのわたしの武器は、お話づくりとお絵かき。友だちを主人公にした、いわゆる「ご当

コラム 想像力をふくらます『のはらうたかるた』

『のはらうたかるた』は、『のはらうた』の詩の一節が読み札になり、詩の主人公の絵が取り札になっています。普通のかるたと違い、読み札に書かれた主人公(生き物)の特徴をイメージできないと、取り札を取ることはできません。

では、例題。

①「ああふわり　かぜのなか　おおひらり　はなのみち」
②「おれの　こころも　かまも　どきどきするほど　ひかってるぜ」
③「かなしいと　おもく　ひきずる　うれしいと　かるく　はためく　しっぽは　ぼくの　こころだ」

『のはらうたかるた』で主人公を完ぺきにイメージできるようになったら、クラスでオリジナルかるたをつくってみるのもおススメです。

『のはらうたかるた』[(株)童話屋]発行　定価 2,520円

[例題の答え] ①あげはゆりこ　②かまきりりゅうじ　③こいぬけんきち

読者プレゼント

詳細は43ページ

『わっしょいのはらむら』(株)童話屋刊
くどうなおこ 詩・絵　定価 1,523円

地ファンタジー」をつくって、みんなに喜んでもらうことでなじんでいく。もともとお話づくりは好きだったけれど、これでかなり鍛えられましたね(笑)。

実は、詩を書くというのは、わたしにとっては、自分の中のバランスをとる作業だったのです。自分の中のごちゃごちゃした内面をうまく表現できず、いいこぶりっこの八方美人で表は明るく振るまっていました。だけれど、本当のわたしは何なんだろうという、中学生になって特に強くなっていたそのもやもやを解消するために、最初はノートに自分の気持ちをただ書きなぐっていたのです。書くと何だか気分がすっきりする。目いっぱい思いを書き出して、バランスがとれたと思うまで書くとノート1冊、あるいは夜中の2時までかかってしまう。バスケットボール部で毎日くたくたになるまで練習して帰って来るわけですから、身体はものすごく疲れている。それで、何かいい方法はないかなと思っていたときに、教科書にあった「詩」の形に引かれたわけです。字が少なく、かつ一文字一文字「ぼくらは選ばれました」という感じがいい(笑)。

やってみるとおもしろい。それは、中学・高校・大学、そして社会人になってからも続いたのです。

女性初のコピーライターとして

大学卒業後は、当時としては非常に珍しいコピーライターとして博報堂に入社。それは書くという延長線上だったのでしょうか?

大学を卒業する時、書くことは引き続き自分の中のバランスをとる作業に過ぎず、生きていくために必死で就職活動をした結果、何とか採用してもらえたのが博報堂だったということです。1958年当時、『女性自身』などの女性週刊誌が発刊され始め、本当に目が回るような忙しさが待っていました。

そんな中、25歳の誕生日と父の死が大きな転機となりました。夜中に(今日が25歳の誕生日だったと気づいたとき)突然、それまでの誕生日とは違う思いが込みあげてきたのです。「人生あと何年あるんだろう?」。そんな思いを抱えていた中で、ある日、ドアに電報が差し込まれており、そこには「チチシス」とあった。永遠に生きているような気がしていた好きな父の死。「これでいいのだろうか」「本当にやりたいこと、好きなことがある?」と自分に問い直してみたら、何にもないことに気づいた。夢がなかった。もちろん必死で生きていこうと仕事をしていたわけで、そのこと自体を否定はしたくないけれど、「収入が減っても、本当にやりたいという生き方をやってみよう」と思ったのです。そして、その前にまず、中学生の時から書きためていた段ボール箱いっぱいの詩のようなものを本にすることを決め、父が亡くなって8カ月後に、24編の詩を収めた最初の自家版詩集『工藤直子詩集』をつくり、その翌年、博報堂を退社しました。

言葉にも、出会うタイミングがある

フリーになることについてまわりの反応はどうでしたか?

それはみんな反対ですよ(笑)。唯一、「思い切ってやってごらん。応援するよ」と言ってくれたのが、博報堂の当時の制作部長。みんなに敬愛されているかっこいいおじさまだったのですが、彼のその言葉でホッとして決心がついたのです。彼からはこんな言葉もいただきました。「直ちゃん、人はね、死ぬまでちゃんと生きているんだよ」。言葉にも出会うタイミングがあるのですね、心に響きましたね。

40歳で気づいた6歳の時に得たもの

工藤さんのこれからと学校の先生へのメッセージをいただけませんか。

いま、75歳になり、残りがどれぐらいあるかはわからないけれど、「正真正銘のわがままかってな時間はこれからだ」と(笑)、それを楽しもうと思っています。特に、80歳の扉を開けたらどんな風景が見えるのか。それがとても楽しみ。20代の時は想像もしていなかったけれど、よれよれになってもよれよれなりの見え方がきっとあると思うから。いま見える風景と何年後かに見える風景はきっと違うはず。

まだ台湾にいた小学校1年生の時、担任の女の先生が、必ず毎朝、5分ほど本を読んでくださったのです。『十五少年漂流記』と『黄金丸(こがねまる)』。両方とも「そのとき、○○は、△△せしが…」という擬古文という古い時代の文体で書かれた文章です。わたしは教室でキョロキョロしている子どもでしたから、「この子は、全然聞いてないな」「あんまり効果はないかな」と先生は思われたかもしれない。でも、こういうのも後になって気づくのです。40歳ごろのことでした。あのとき先生が読んでくれた言葉のおもしろさが、ずいぶん書くことに影響していると気づいた。取り組んだことがお宝になるかどうか、それは小学・中学生、あるいは高校生でもわからないかもしれない。先生がもう忘れたころ、もしかしたらもう亡くなられてから、教え子は気づくかもしれない。確率がどのくらいかはわからないけれど、わたしは少なからずあると思うのです。ぜひ、その「未来の風景」を楽しみに、「いま」に取り組んでいただきたいと思います。

出会うべくして出会ったその言葉に
勇気をもらって。

絵:くどうなおこ『わっしょいのはらむら』[(株)童話屋刊]より

人間には限りがある。
けれどその限りまでは、
人はちゃんと生きている。

のはらむらMAP

イラスト提供:(株)童話屋

教材研究

ようこそ、のはらむらへ『のはらうた』の世界を子どもたちに!

工藤直子さんの『のはらうた』。この詩を題材に、筑波大学附属小学校・白石範孝先生が、3年生に向けて「読む力を高める」ための活動に取り組みました。その内容、そしてそこから誕生した子どもたちの作品を紹介します。

白石 範孝 先生

詩の世界に飛び込み、表現に向かう学習とは?

現在、詩の学習では「暗唱する」「絵に描く」「音読する」などの授業が中心です。しかし「何を手がかりに詩の内容を理解し味わうのか?」が明確にされていないのではないか、そう考えた白石先生は、子どもたちが表現技法(レトリック)から詩の世界をイメージし、感動し、創造的に参加していく。そして、その活動を通じて読む力を高めるという、新たな活動を始めました。

活動では、まず『のはらうた』を音読し、そこにある詩の仕組みを見つけるように指導します。そして、それぞれの連の内容を想像し、比較・思考することで、「繰り返し(リフレーン)」「体言止め」「比喩」「擬人法」「擬声語・擬態語」「リズム」といった表現の約束ごとに気づかせていきます。「どこをどのように、どう読むか」を学んだ子どもたちは、詩の世界の約束ごとをふまえ、書くという表現に向かっていきます。そして「のはらむら」の住人になりきって、たくさんの作品を生み出しました。

くどう なおこワールドにどっぷりつかろう!

※ジョニーの伝言板

「のはらむら」の住人になった子どもたちは、ここで仕事も見つけて楽しく生活しています。みんながつくったものを読んでみると、村での様子がとてもよくわかります。今回は、それをみなさんに紹介します。さあ「のはらむら」の世界に出発しましょう。

※「ジョニー」は、子どもたちが名づけた白石先生のニックネーム

筑波大学附属小学校 4部3年生のみんなが、『のはらうた』の世界を体験しました。

■活動の流れ

①『のはらうた』の世界に触れる

②表現技法から作品を読む

③「のはらむら」の住人として活動する

村の住人になるため まずは「住民登録」

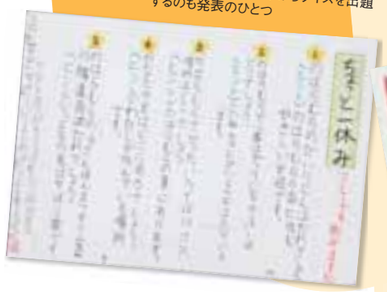
活動で詩を学んだ子どもたちは、住人になるため、「のはらむら」で使う「のはらネーム」を決め、マップを見てどこに住むかを考えます。そして住民登録のための「自己紹介文」を書きます。自分はどんな生き物で、どんな家に住んでいるか、村でどんな生活をしているかを、具体的にイメージし表現します。

「のはらむら」の住人になりきって、みんなに「自己紹介文」を発表

このときは工藤さんも参加し、子どもたちに直接アドバイスをしてくださいました

イメージをふくらませ 創作&発表にチャレンジ!

「書く表現」からは、さまざまな作品が生まれました。詩には、活動で学んだ技法や約束ごとが活用されています。また村での生活を想像し「どんぐりひろい」などイベントの告知チラシも作りました。日々のちょっとした出来事を盛り込んだ新聞もあります。どれも内容はもちろん、デザインにも工夫を凝らしています。また「村の歌」を作るため、みんなから歌詞を募集し、音楽の先生に曲をつけてもらいました。募集した歌詞が選ばれず、あとから自分で曲をつける子も出てきました。



「のはらむら日記」の中からクイズを出題するのも発表のひとつ

新聞を発行して「のはらむら」の住人に情報を提供

イベントを企画してチラシを作成

最後に、できあがった作品をみんなで発表。それぞれの作品を見て感想や意見を出し合い、「村の歌」を合唱しました。

作品を音読、みんなで歌うなど元気に発表しました。ほかの子の作品から刺激を受けたりも!?

「のはらむら」の歌の詩を創作

活動を終えて……

活動の記録や感想を「日記」として残しました